神に祀られた芋代官

小林貞夫

「日本凶荒史考」によると、江戸時代には大体二年に一回の割合で何処かに凶作・飢きんが起っている。そして、四・五十年に一度ぐらいの割合で何百万人という餓死者を出す大飢きんに襲われている。

中でも享保・天明・天保の飢きんは三大飢きんと呼ばれ、全国の半分以上に被害を及ぼした大規模のもので、この他にも殆ど毎年のごとく局地的に凶作があり餓死者を出していた。

郡内地区に於ても天明三年（一七八三）には大飢きんに襲われた。このとき、森島弥十郎（其進）は米三九〇俵を飢民救済のために供出し、島屋の店先に救い小屋を設け米粥の炊出しを行ない、また、応分の施米をして郡内上郷一帯には餓死する者もなく「情の島屋」といわれて現在にまでその徳を賛えられている。

また、天保四年（一八三三）の飢きんは、「五月から八月の間冷気が続き、その上暴風雨が頻発して未曽有の凶作となり、三年間に渡る凶作により諸人は困窮し、谷村長安寺の門前に死者およそ一〇〇人余、所々に捨子数しれず」と、「下和田村仕立屋宗兵衛記録」に当時の惨状が誌されている。江戸時代の飢きんは、正に言葉に尽せないこの世の地獄であった。

ときの代官中井清太夫は、上飯田代官より安永六年（一七七七）甲府代官に就任し、天明四年に谷村代官を兼務し、郡内領を併せて支配するようになった。

代官は民政を直接担当し、飢きんの対策は重要な任務であった。これには応急の救済と平常時の備荒施策とがあり、災害の場合には全責任を持っている代官の臨機応変の行政能力が大きくものを言った。清太夫が農民の夫食（ふじき）（食料）としてじゃが芋を甲州へ導入した確実な記録は見当らないが、伝えられている所では、甲府代官時代、幕府の許可を得て種芋を九州から取り寄せ、先ず九一色郷の村々に栽培させたといわれている。

天明四年、清太夫は郡内領を支配するようになり種芋を九一色郷から取り寄せて栽培し、各村に奨励した。結果は予想以上の収穫があり、じゃが芋は甲斐一国に広まり、さらに信濃（長野県）越後（新潟県）上野（こうずけ）（群馬県）下野（しもつけ）（栃木県）武蔵（埼玉・東京・神奈川）秩父（埼玉県）等まで急速に普及していった。

信濃・越後・上野・下野ではこれを「甲州芋」と呼んでいるので、甲州から伝わったことは明白である。

馬鈴とは馬の飾りにした鈴のことで、鈴の形が馬鈴薯とよく似ているところから付いた名称といわれている。高野長英の書いた「二物考」（天保七年）には馬鈴薯の和名としてジャガタライモ、甲州イモ、清太夫イモ、清太イモなどと呼ばれた。

じゃが芋の原産地は、ペルー・チリなど南米のアンデス山中にあった。十六世紀の初めにスペイン人によって初めてヨーロッパに輸入され、さらにポルトガル・スペイン人の東進につれて忽ち東洋に伝えられた。日本へは、天文年間（十六世紀ごろ）に来航した彼等によって沖縄や種子島にもたらされた。慶長年間には九州にも進出するようになった。彼等のもたらした種芋が、彼等の東洋進出の最大拠点であったインドネシアのジャカトラ（ジャワ島のバタビヤの旧名）のものであったため、当時一般には、ジャガトラ芋と呼ばれるようになった。

天明七年（一七八七）四月、江戸へ戻る清太夫を多くの人達は感謝の気持をもって国境まで見送ったと伝えられている。

じゃが芋によって貴い命を救われた人々は、のちにこの芋を「清太夫芋」と名づけた。上野原町八米の龍泉寺に五十年程前までは、清太夫を「芋大明神」として祀って、毎年芋祭りを開催していたがいつの間にか絶えてしまった。しかし、檀家総代を委員とする再建委員会ができ、地域住民から寄付を募り、昭和五十六年十月四日鎌倉建長寺中川貫道管長の書により「芋大明神」の碑と由来碑が建立された。

（都留市中央三の一〇の一）

参考「甲州芋大明神再建記念誌」龍泉寺編

「甲信義民騒動記と二人の芋大官」島田駒男編

芋大明神の碑